

幕末明治の写真師列伝 第十七回 下岡蓮杖 その十六

今回、『写真事歴』の次の記述については説明が必要なので、まず原文の方を先に紹介することにする。

「既にして邦人の迷想稍や消散し、蓮杖の門に來り写真するもの漸く多きに至る。生麦の変ありし時、蓮杖恰も弁天通に在て業を営めり。横浜市中の人民、荷担して難を地方に避け、騷擾云ふべからず。然れども蓮杖意とせず、業を営む毎の如し。時に諸藩の士死を決して出戦せんとする者、父に記念せんため、武具を装ひ長槍を掲げ來て写真するもの多し。此間ショーヤは騷擾の日ならず鎮靜すべきを察し、蓮杖を勧めて業を営ましめ、己れは市中を奔走し、騷擾に乗じて廉価に器具を買収し蓮杖の家に托し、諸種の什具積て山をなすに至る。而してショーヤの言誤らず、騷擾数日にして止む。」

これを判りやすく書けば、「ようやく日本人の写真に対する偏見も少なくなつて、蓮杖の所へ写真撮影を頼みに來る客も多くなつてきた。生麦事件の起きた時(文久2年(1862)8月21日)には、久之助(蓮杖)はちょうど弁天通りにて写真館を営業していた。横浜市中の人々は、事件の影響を恐れて家の物を地方に避難させる者も多く、大変な騒ぎであった。しかし、久之助(蓮杖)はそんなことは気にせず、毎日いつものように写真館を営業していた。このような時であるから、諸藩の武士で、その死を覚悟して外国人と戦をする前に刀や弓、鉄砲、長槍などの武器を持って、父親に自分の姿を写真に写して残したいと思う客も多かった。この騒ぎの頃、ショーイヤーは、久之助(蓮杖)にはいつものように写真館を営業するように勧めて、自分はこの騒ぎもじきに収まるであろうから、横浜市中を奔走してこの騒ぎに便乗して、横浜から逃げ人々が手放すいろいろな家財道具、什器などを数多く、しかも安く買い占め、それらを久之助(蓮杖)の家に預けていた。そうこうするうちに、ショーイヤーの予想通り、この騒ぎも数日して治まってしまった。」となる。

このことは、明治41年6月25日～8月15日に『横浜貿易新報』に掲載された『開港側面史』(其81～99)の「在東京、下岡蓮杖翁談」という蓮杖の談話記事でも「三日間真の闇」として同様のことが語られている。(この蓮杖の談話は『開港側面史』(横浜貿易新報社、明治42年)、復刻版『開港側面史』(歴史図書社、昭和54年)にも掲載されており、同書を翻刻した『横浜どんたく』(有隣堂、昭和48年)にも収録されている)

この記述を読むとこの騒ぎがあったのは、生麦事件の起きた文久2年(1862)8月21日、当時の出来事のように思えるが、実はそうではないようだ。

斎藤多喜夫『幕末明治 横浜写真館物語』(吉川弘文館、平成16年(2004))の「下岡蓮杖」によれば、「このような事件が起きたのは、生麦事件の犯人の処罰と賠償金の支払いを求めてイギリスが最後通告を發し、横浜に軍艦を集結し始めた文久3年春のことと考えねばならない。『横浜沿革誌』文久3年3月条には、次のように記されている。

英国軍艦數艘渡來シ、去年生麥二於ケル加害者ヲ
処刑セシメンカ、將夕贖金ヲ索メンカ談判ヲ申入
ル、此談判發ルヤ兵端ヲ開カンヲ恐レ、物情恟々
トシテ横浜市中動揺シ、老若男女ヲ退去セシメ、
家財ヲ運搬シ、家屋ヲ放棄シ、或ハ之ヲ賤売シ、
遠近ニ難ヲ避クル者多ク、一時閉港ノ思ヒアラシ
メタリ、幾モナク平和ノ談判整ヒシト聽キ、帰港
シテ營業ス、蓋シ狼狽ニ失スルヲ嘆モアリ、又大
胆ヲ誇リシモアリ。

神奈川奉行所から住民に退避命令の出たのが3月17日、戦争回避の触書が回ったのが19日である。これが蓮杖のいう「三日間真の闇」であろう。」とあり、このことは、文久3年3月の出来事であるようだ。

久之助(蓮杖)が文久2年(1862)に弁天通りで写

真館をすでに開業、営業していた事は、近年、文久2年5月撮影の「木村政信像」(東京都写真美術館所蔵、ガラス湿板写真)や文久2年撮影の「若き下岡蓮杖像」(板部正雄氏所蔵、ガラス湿板写真)が見つかることから確認できている。

また、参考文献資料としては、「文久2年(1862)菊月(9月)」の序を持つ『珍事五ヶ国横濱はなし』の初版ではないが再版の十三丁追加「市中書落の部」には、「同(弁天通)五丁目蓮杖齋と申ス画師ハ異国直伝の写真鏡油画仕候」という記述があり、文久2(1862)年の『横浜商人覚書』には、「弁天通五丁目に居をなす桜田蓮杖」という記述もある。

その他に、文久3年(1863)版『美那登能波奈横浜奇談』に、「写真鏡という一種の奇物あり」とその次に効用を書かれた後に、「当地弁天通り五丁目に居住する桜田蓮杖といふもの、其伝を覚得、業ひにいたしめるが、異人の仕方と少しも違はず、働ハ到て異人の方よりハよほど下直に出来るなれば、若右の画像などの望ミある人々ハ、彼ものへ命ぜられバ便利ならん歎」とある。

これに続く『写真事歴』の記述では、次に横山松三郎が下岡蓮杖の弟子となる仔細が書かれているのだが、これについては後日、横山松三郎について書く際に詳細を述べることにしたい。そのためこの場では、元治元年(1864)頃に横山松三郎が下岡蓮杖の弟子になっていると留める。横山松三郎は蓮杖の元で修行して写真術(コロジオン湿板法)や新技法である印画焼付法などを学び、慶応4年(1868)に江戸に出て両国元坊にて写真館を開業している。(その後、上野不忍池近くの池の端仲町に移転)

さて、この頃、横浜には、後に横浜駅、税関、町会所などの設計にあたったブリジェンス(1864年来日、R.P.Bridgens)という外国人が居り、この人物はショーイヤーの妻の妹であった。そして、このブリジェンスは設計、製図師で、石版印刷の技術も持っていた。久之助(蓮杖)はこのブリジェンスと親交を結び、彼の勧めもあって10ドルを支払って、石版を二枚とその機械を購入し、この扱い方をブリジェンスから習うことにした。石版については以前にも英国聖公会牧師のベイリー(M.Buckworth Bailey)が、慶応3年(1867)に「万国新聞」を發刊した際に、その紙面に石版を採用していたのだが、それは単純な使い方であつた濃淡を表現するなどの技法ではなかつた。久之助(蓮杖)はブリジェンスから石版印刷の技術をよく学び、試みに徳川家康公の肖像画を石版にしてみた。この当時、江戸で石版の技術を研究していたのは、司馬江漢から銅板を学びその版画を製造販売していた「玄々堂」の松田朝朝らだったが、彼らや日本画家の石井鼎湖は、度々久之助(蓮杖)の元を訪ねて、久之助(蓮杖)が徳川家康公などの肖像画を石版で印刷する様子を見学しに來ていた。

また、久之助(蓮杖)も自分が石版の技術をうまく習得したことを、江戸に居た弟子の横山松三郎に手紙で知らせてやると、横山松三郎はその手紙を手にして即座に久之助(蓮杖)の元を訪ねて、10日ばかり久之助(蓮杖)の元に滞在して、この技術を久之助(蓮杖)から学んでいる。横山松三郎は、江戸に戻るまで更にこの技術に自己の改良も加えるため、部屋にこもり研究している。その後、石版の技術を自分のものとした横山松三郎は、自分の弟子である亀井至一や下国巖之助などに伝えている。亀井至一は明治初期の洋画家で油絵、石版を横山松三郎から学び、後に「玄々堂」に呼ばれて、これ以後、石版画が広く知られることになった。下国巖之助は横山松三郎から石版を学ぶと紙幣寮に雇われて、後に砂目石版の名手といわれたが、その晩年は不遇で、放浪の後、没している。

(森重和雄)